保育者になるための読書案内

これから社会に出て、仕事に就く人のために

2019

横浜女子短期大学図書館

まえがき

これから保育者になったり、社会に出て行くみなさんにとって、大切なことは、自ら考え、行動する力を養うことではないでしょうか。こうしたことは、案外見落とされがちです。それは、当たり前だと思われているからです。

しかし、少しでも時間があったら、本当に当たり前のことなのかを考えてみるとよいのではないでしょうか。ついでに、そんなことをどこかで習ったことがあるかどうかについても。

もし、そうした経験がなかったとしたら、自ら考え、行動する力というスキルは、自分で切り開いていかなければなりません。そのときに、どうしたらよいでしょう？

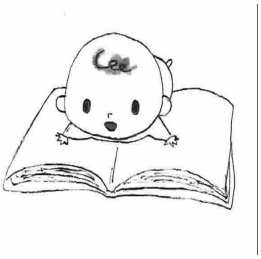
読書だけがその役に立つ、などとは言いません。でも、これから先、社会人となり、自分で何かをしなければならなくなったとき、相談相手になってくれるのではないでしょうか。だって、本は、あなたがたの先達によって書かれたものですから。次のような構成を考えてみました。

第1部　保育者になるための読書案内

ここには、先生方からのメッセージが収められています。みなさんが、これから保育者になったり、社会人になるときの参考になるような本が紹介されています。いつでもいいです。ぜひ、手にとって、目をとおしておいてみてください。

第2部　いつでも、どこでも、どんなときでも、あなたのそばに、本を

ここで紹介する本は、教科書のようなものでも、また、娯楽のための本といったものでもない、中間的なものです。これらを読むことによって、人間形成の基礎をつくることになるのではないか、人とかかわる仕事に就くための一助となるのではないかと考え、2018年度の読書会で取り上げた本から選びました。本について話をするって楽しいよ、というお誘いです。



第１部　保育者になるための読書案内

倉橋惣三『**小さな太陽**』(フレーベル館　2011)ほか

亀谷美代子

倉橋惣三・ことば　大豆生田啓友・撰／小西貴士・写真『**小さな太陽**』(フレーベル館 2011)

この本は、ポストカードブックです。16 枚の子どもの写真に倉橋惣三が著した「育ての心」の詩的な言葉が添えられています。「小さな太陽」というタイトルは、「天の太陽は雲につつまれる日があっても、ここの小さな太陽たちは、いつだって好天気だ」という文章からとられています。あなたも、保育する中で、たくさんの子どもの表情、仕草、心に出会うことでしょう。そして、『育ての心』も読んでください。

繁多進『**愛着の発達**』(大日本図書 1987)

著者の繁多先生は横浜女子短期大学の保育センターの研修を長年担当してくださり、多くの保育者に「愛着関係」の大切さを具体的にそして科学的に講義してくださいました。

保育がうまくいかなくなったり、理解しにくい子どもに出会ったり、子どもの素敵な可能性に接した時……読んでください。親と子ども、子どもと保育者、人との関係の原点が示されると思います。

時実利彦『**人間であること**』(岩波新書 1973)

保育している中で、「子どもはどうして……？」「親子って何？」「家族って何？」……と、そして、あなたも含め「人間って何？」と思ったら、読んでください。20 億年前ごろから、この地球上に生命が誕生し、その生命の一つとして、人間は他の動物が発生したり、絶滅したりする中、今も歴史を繋げ、文化を生み出し生活しています。いいかえれば「保育」はその一端を担っています。「人間」を知り、「保育」の意味を探る一つの手立てになると思います。

以上は保育の近・現代における保育・幼児教育思想、心理的、生理学的解明から人間の発達の原理と子育てにおける意義を説いています。それに加え松田道雄『**定本育児の百科**』（岩波文庫 2008）は、昭和 40 年代、当時代表的な各家庭が備えた「育児書」です。保育所、幼稚園での保育の参考書の源になっていた本書が 2007 年にリニュウアルされて、文庫本 3 巻として出版され、読まれ続け 2013 年現在第 9 刷となりました。

そして、育児が社会化された現代、2016 年に秋田喜代美監修『**あらゆる学問は保育につながる**』（東京大学出版会）が出版され、東京大学に「東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター」が誕生しました。本書は前保育学会長の秋田喜代美氏が中心に 10 名の研究者が第 1 部「社会と保育」、第 2 部「発達と保育」、第 3 部「保育と学問」に著しています。彼等は「子育ては、学問にとって最高難度の研究テーマ、あらゆる学問領域の専門家が結集し、新しい知の地平を切り拓く」とし、「保育」の奥深さを現わしています。

柴田悠『**子育て支援が日本を救う**』（勁草書房 2016）は、京都大学人間・環境学研究科の准教授が「経済成長率」「労働生産性」「出生率」「子どもの貧困率」「自殺率」などの重要な社会指標に対し、子育て支援など社会保障政策がどのように影響するか統計的に分析し、「子育て支援が日本を救う」という結論を導いています。

白石正久『発達の扉　子どもの発達の道すじ　上』(かもがわ出版 1994)

佐野　眞弓

この本は、私が保育者だった時そして今でも、とても大事にしている一冊です。再就職してお世話になった園長先生が、「自分の保育に悩んだり躓いたりした時は、子どものことを考えることから道は開けます」と教えてくださいました。そんな時出会ったのがこの本です。子どもの発達を、できたできないでは無く、子ども自らが乗り越えていく一歩前をいく活動と捉え、乗り越えていく葛藤を支え励ます大人のあり様とありのままの子どもの姿を通し書かれています。落ち込んだ時はこの本を読んで、「そうだ目の前の子ども一人ひとりを大切にしていくことが私の仕事」と思ってきました。皆さんも、自分の保育に悩んだり落ち込んだりしたら、ぜひ読んでみてください。著者自らが撮影した子どもたちの生き生きとした目とかわいい表情の写真と、まるで講演でも聞いているような優しく語りかけるような文章は、前頭葉に染入る様な心地よさが感じられます。

津守真『保育者の地平－私的体験から普遍に向けて－』

（ミネルヴァ書房 1997）ほか

本田　幸

津守真『**保育者の地平－私的体験から普遍に向けて－**』（ミネルヴァ書房 1997）

著者の津守真先生は発達心理学の研究者として、長年にわたり子どもの研究をされてきた方です。『保育者の地平』には、著者が 12 年間、愛育養護学校の校長として子どもと関わり、保育実践を行った体験がまとめられています。ご自身の保育者第 1 日目から、12 年間の保育者としての実践と省察が書かれています。５年目からは、担任も経験されています。この本を通して、保育者にとって大切なのは子どもと過ごす「いま」であるということを強く教えられます。さらに、保育を実践する上で、子どもを理解することの難しさや担任としての悩みなどにも触れられています。そのような意味でこの本は保育論であり、保育者論でもあります。保育の仕事は、楽しさや喜びが沢山あります。けれども、私は、保育は言葉や理論で表現されるほどに簡単ではなく、実践することは本当に難しいと常々思っています。難しいからこそ、やりがいがあるのかもしれません。

吉村真理子著・森上史朗［ほか］編『**保育実践の創造－保育とはあなたがつくるもの－**』（ミネルヴァ書房　2014）

本書は、著者吉村真理子さんの 35 年にわたる保育の実践記録を、改めて復刊したものです。30 年以上前の記録にもかかわらず、そこから学ぶことはたくさんあります。吉村氏は「保育をするよろこび」からの出発が大切であると述べています。この本には、著者が保育の中で困難な場面に遭遇した時、それを知恵と工夫と仲間同士の協力（協働）で乗り越えてしまう事例が書かれています。例えば、こんな事例です。ある 6 月の暑い日に、子どもたちをなんとかさっぱりさせてあげたい。そこで、保育園の 2 階の乳児室からホースをひっぱり、園庭にいる子どもたちに向けてお湯のシャワーをつくってあげました。子どもたちは大喜びです。吉村氏は、前向きに、真摯に、時にユーモアも忘れずに保育に取り組んできた方です。この本の、「－保育とはあなたがつくるもの－」という著者からのメッセージは、いつまでも私に残るものとなりました。

ヨシタケシンスケ『**もうぬげない**』（ブロンズ新社　2015）

「ぼくのふくが　ひっかかって　ぬげなくなって、もうどのくらいたったのかしら」「おかあさんが「おふろに　はいろう」なんていうから　いけないんだ」

お風呂に入るために、男の子は洋服を脱ごうとします。「ひとりでぬぐから　だいじょうぶ！」とがんばりますが、服が頭にひっかかって脱げません。お腹とおへそが丸出しで、顔は服で隠れてしまっています。何しろ手が動かせません。

「このまま　ずっと　ぬげなかったらどうしよう。ぼくは　このまま　おとなになるのかな。」男の子は、服がひっかかったままいろいろな想像をめぐらせます。でも、決してすぐにはめげません。ちょっとシュールで、ユーモラスな絵本です。

私がこの絵本に惹かれたのは、お話しの面白さ、絵の魅力と合わせて、作品の中に日々の生活を一生懸命に生きている子どもの姿を感じたからです。「ひとりで　やりたい！」という子どもの思い。脱げなくなっても何とかなるさ！という逞しい気持ち。「ぼくだって　そのきになれば　じぶんのことぐらい　じぶんで　じぶんで…」男の子の思いが、絵本の中から伝わってきます。子どもには、生きていこうとする力、成長しようとする力がちゃんと備わっているのですね。

亀谷美代子『**平野恒**』「シリーズ福祉に生きる68」（大空社 2015）

元本学教授　**兼子　盾夫**

「おさなごにまなぶ」を生涯、実践した「平野恒」

児童福祉に生きる恒の姿－『記念樹』の園長のモデル

児童福祉に生きる平野恒の姿は、昭和 40 年から翌年にかけ日本中に感動を与えた、TBS の TV ドラマ『記念樹』に描かれた、厳しくしかも優しい園長の姿そのままである。

恒から聞く実話を元に木下恵介監督が養護施設の若い保母と子ども達の心の交流を一話完結で描き、結婚を機に園を去る保母の家に子ども達が記念の樹を植える、このドラマはその年の「児童文化賞」を受賞した。

平野家の「キリスト教的愛」と「家庭環境」－恒の生涯を貫く原動力

恒の教えを直接受けた著者は児童福祉とその前提となる保育者教育に捧げた師の 98 年の歩みを読みやすい筆致で「福祉シリーズの一冊」に切り取って見せる。

医師で国会議員の父友輔と日本の最も早い時期の看護師である母藤の第二子として明治に生を受け平成に没した恒の生涯。理想的な家庭環境に恵まれただけ、それは亦「天職」に伴ういくたの試練との闘いの連続でもあった。

恒はクリスチャンで自由民権家の父からキリスト教の根底にある人間の尊厳と隣人愛を、母からは衛生的な家庭環境と保育に必須の小児栄養の知識を実践的に与えられた。これらはそれに欠ける子ども達を前にしたとき、大人の義務・子供の権利として、終生、恒を前進させ、問い続けさせた保育の「原動力」である。

「無鉄砲」の実践としての転機－神への「完全なる委託」

著者は手際よく恒の生涯を何本かの柱をたて、即ち生い立ち、矢嶋楫子・二宮ワカとの交流、信仰のネットワーク、人生の転機と社会事業・児童福祉、そして保育・幼児教育のステージへと纏め上げる。恒の生涯の転機は二度ある。一度目は二宮ワカの推薦で矯風会横浜母子寮の寮長を引き受けたとき。しかしこれは二年を待たず恒を青山学院神学部へと進ませる。それは婦人の更生に根本的な矛盾を感じた故で、負の循環を断ち切るには大人になってからでは遅い、「幼児期の保育こそ人間生涯の人格形成に一番大事だ」との信念に基づく。そして二度目は敗戦直後、戦災で恒の福祉事業がすべて灰燼に帰したときだ。

思えば恒の人生は大正 12 年の大震災と昭和の太平洋戦争という日本の二度の激動期を生き抜いた波乱の人生である。大震災における平野家の全壊や翌年の父友輔の突然の病臥は恒個人にとって計り知れない不安、苦痛、困難の因となったであろう。しかし天の父しか畏れる者を持たない気丈な恒をも絶望のどん底に陥れたものは終戦直後に直面した人間の忘恩、無情さと社会に充満する利己主義で、どんな愛を与えても裏切りで報いる心無い大人の対応であった。

がしかしこの時は皇后様や秩父宮妃殿下という皇室からの励ましが明治人恒を立ち上がらせた。恵まれない母子の福祉、子供の権利のため自分がやってきた仕事を評価して下さる方々が存在する。子供たちのためにもう一度、立ち上がるのだ。そう思うと恒の行動は素早い。戦後の復興期に大活躍し海外視察、ホワイトハウスの会議にも呼ばれる。その成果を還元し各地で講演する。各種の委員会に委員として加わる。昭和 15 年に創った保母学院を再建し、中村に再建された保母学院は、最終的に学校法人格を得て昭和 41 年横浜女子短期大学（保育科）となった。

「おさなごにまなぶ」を生涯、貫き通した平野恒の生き方を伝えるこの魅力に満ちた伝記には冒頭の平野建次学長の「『おさなごにまなぶ』の思い出」から巻末の「年譜」他に至る迄、恒の血を引く者、教えを直接受けた者、恒を尊敬する者という恒の周囲のすべての人の協力が伺える。著者は「おわりに」ある如く直接、恒の教えを受けた者だが、その後地方行政にも携わりつねに児童福祉、保育の最前線を歩み、かつて恒の創立した短大で教鞭をとり、今また白峰保育園の園長を勤める保育者である。

第2部　いつでも、どこでも、どんなときでも、あなたのそばに、本を

フランツ･カフカ『変身』（新潮文庫　1952）

１．変身

ある朝、外交販売員（セールスマン）のグレーゴル・ザムザは、巨大な一匹の虫に変身していた。理由は不明。せめて可愛い虫であって欲しいところだが、様子を見に来た勤務先の支配人がグレーゴルを見た瞬間、「風が吹き過ぎるような声」で「おおっ」と言い「ぽかんと開けた口に手を押しつけて、ゆっくりとあとじさりして行った」（p.29）り、母親が「「助けてえ、助けてえ」と叫んで」「無意識にうしろへすっとんだ」（p.35）り、どうやらとんでもなくおぞましいような虫に変身してしまったようだ。

２．変身後の生活

本来グレーゴルは熱心なセールスマンであった。父の商売が5年前に破産した後、家族（父母妹）の生活を支えるため必死になって働き、一家の大黒柱になっていた。そしてとりわけ妹をかわいがり、音楽学校へ入学させてやることが夢だった。

しかし、変身してしまったグレーゴルは、仕事に行くことはおろか、部屋から出ることもままならない。飲み食い・排泄は全て自室で行い、妹がその世話をした。大黒柱を失った家族はそれぞれ自分のできうる仕事を獲得して、なんとか生活した。

家族は、グレーゴルの扱いに困り切っていたが、いくつかの不幸な出来事により、グレーゴルは飲食できなくなり、衰弱して死をむかえることになる。

３．家族とは

家族の一人が、急に自分の理解ができないおぞましいものに変身してしまうということは、非現実的なようで、実はとても身近にありうることではないかと感じる。子どもの家庭内暴力や夫婦間のDVなどはその一例であろう。

家族はグレーゴルを疎みつつも、完全に「虫」だとして棄てきれない。「家具を片づけたりすれば、あたしたちがあの子がよくなることをすっかりあきらめてしまって、まるであたしたちがもうあの子のことをかまおうとしないんだということははっきりと言ってしまうようなことになるじゃないの。」「部屋の模様はむかしとそっくりそのままにしておいたほうが、またグレーゴルが人間にもどったときに……それだけ容易にそのあいだのことがわすれられようというものじゃあるまいかねえ。」という母の言葉が切ない。

グレーゴルは決して自業自得で虫になったのではなく、むしろ家族のために5年間必死になって働いた。しかし、グレーゴルがいなくなってしまえば、家族の生活はそれなりにまた回っていく。なんともやりきれない物語であるが、「家族」というものの真理を見事に表現している。

（O）

サマセット･モーム『月と六ペンス』（新潮文庫 2017）

１．ストリックランド

主人公ストリックランドは世捨て人ではあるが、自己中心的な問題児的要素の強い人物。絵を描くという理由だけで、何の前触れもなく仕事を辞め、妻子やすべてを棄てて出奔している。

イギリス、フランス、タヒチと場所によってストリックランドから受けるイメージが違うことは面白いと思う。イギリスでは、自分を抑えて、家族のために働くごく普通の男性に見える。が、人付き合いに関しては苦手だったように見受けられる。

タヒチでは、口が悪いのは一緒のようだが、もっと落ち着いた感じがする。絵を描くことが絶対条件らしいが、周りに自分をかまう人がいても邪険にはしていない。きっと「安住の地」だったのだろう。「生まれる場所を間違えた人がいる。」（305p）というのはまさにストリックランドのことなのだろうと思った。

２．わたし

作家である「わたし」はストリックランドに

受け入れられた一人で、ストリックランドに魅了されていた一人だったのだろう。だから最後まで付き合う形になったのだと思う。普通であれば、ストリックランド夫人から頼まれてフランスまで様子を見に行き、報告しておしまいになるはずだ。その後のフランスでのつきあいはないだろう。ストルーヴェが絶賛しようとも距離を置くことはできたはずだが、タヒチでは、周りに聞いて回っている。ストリックランドがストルーヴェにした仕打ちに腹を立てつつも、ストリックランドとは「わたし」にとって引きつける何かを持った人物だったのだろう。

３．おわりに

この小説は、ゴーギャンがモデルだが、あくまでもフィクションでゴーギャンの伝記ではない。月は「美」や「狂気」を、六ペンスは「俗世の安っぽさ」や「日常」を表しているらしい。六ペンス銀貨は結婚式に幸せを祈って花嫁の靴の中に入れるとのこと。そういう意味ではタヒチでのストリックランドの幸せを祈っている意味もあるのかもしれない。　　（T）

灰谷健次郎『太陽の子』（新潮文庫 1986）

１．ふうちゃんの心の悩み

沖縄出身の両親を持つ神戸生まれのふうちゃんは 11 歳。両親が営む「てだのふあ・おきなわ亭」（琉球料理店）は、夜になると沖縄出身者が集まり、遅くまで賑わう。両親やお客さんに見守られて育っているふうちゃんは幸せだ。けれど心には常に心配ごとがある。心の病気を患った大切な父親のことが片時も頭から離れないのだ。つい半年前までは沖縄のこと（海の色や子どもの頃の遊びなど）を何でも話してくれたのに、最近は笑顔がなくなり、突然ふうちゃんを抱きしめて泣くこともある。誰かに襲われるという妄想にかられるらしい。その度にふうちゃんは、いつか恐ろしいことが起こるのではと、心がざわついて仕方ない。だから父親の些細な変化を誰よりも見逃さない。やがて、病気の原因は、故郷沖縄に何かあるのではないか、それを知りたいと思い始める。

２．父親のために、過去に向き合う決心

「おとうさんにしても、おかあさんにしても、沖縄のことを話すときは、ほんとうにうっとりする」（p.28）　のに、戦争の話になると途端に口をつぐむ態度をふうちゃんは日頃から疑問に思っていた。「つらい悲しいことがいっぱいあったんやと、みんなはいうけれど、どんなつらいことがあったんか、……だあーれも教えてくれへん」（p.91）。

11 歳の少女が沖縄の歴史に向き合うには「ずいぶん悲しい思いもしなくてはならない」（p.287）から、もう少し大人になったらと周りの大人に諭される。けれど「知らなくてはならないことを、知らないで過ごしてしまうような勇気のない人間に、わたしはなりたく」ない（p.282）と、父親の身の上に起きたことを知りたいと思った。ふうちゃんは自分の頭で考えて行動できる子どもだ。大人の手を借りて、写真集を見、話を聞いた。それは衝撃的なものだったが、決して目をそらさなかった。

３．命をもらって、存在する自分

父親の病気が回復するのではという可能性にかけて、母親は八重山に帰ることを決心した。故郷に帰るお祝いの場面は皆の笑顔があふれていて嬉しい。いつか皆で草花遊びをしたときのように「ひとつのことをおなじ心でよろこんでいる。それは、どんな時間よりもすばらしく豊かだった」（p.87）とふうちゃんは思った。心の病気は皆の心で治せるのだと思い、元気を取り戻せると誰もが信じた沢山の笑い声に包まれた夜、父親の生命は永遠に消えてしまった。ふうちゃんが常に怖れていたことが現実となってしまった。「不幸やかなしみは、それぞれがひとつずつ離れてあるものではなく、つぎつぎつながっているものだということを、ふうちゃんは痛いほど感じ」（p.202）、眼を見開き、泣くこともせず、動かなかった。

生命とは死を見つめてこそ存在するもので、生だけ見ていては生きていることにはならない。戦争は遠い昔のことではなく「死んだ人の命を、今、もらって君たちは生きている」(p.265) ことを忘れてはならない。　　（H）

あらためて考えよう　昔ばなしのすばらしさ
おすすめの昔ばなし絵本5選

昔ばなしには、何百年も前から語り継がれ、時代にもまれながら生き残ってきた、おもしろいエッセンス満載のおはなしが沢山あります。

実習で読み聞かせの絵本に迷ったら、昔ばなしを取り上げてみてはいかがでしょうか？　必ず子ども達の心を惹き付けることができるはずです。

ここではオススメの日本の昔ばなし絵本 5 冊を紹介したいと思います。　（大久保）

【笑える話】

長谷川摂子文　荒井良二絵『へっこきあねさ』岩波書店　2012

おならが豪快すぎるお嫁さんの昔ばなしは何パターンも存在しますが、ここでは荒井良二さんが絵を手がけたものをご紹介します。荒井良二さんのかわいらしい絵とおかしなお嫁さんのお話がマッチして子ども達もくぎづけになることでしょう。

【こわい話】

水沢謙一再話　梶山俊夫画『さんまいのおふだ』福音館書店　1990

やまんばが小僧さんをとことんまで追いかけるとても迫力のあるお話。緊迫感が子どもを惹き付けます。最後の和尚さんとやまんばのトンチ合戦もみどころ。

【泣ける話】

瀬戸内寂聴文　岡村好文絵『月のうさぎ』講談社　2008

自分の身を犠牲にして大切な人を助けるお話。この仏教における菩薩行という考えは宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』のカムパネルラに通じています。

【恋する話】

矢川澄子再話　赤羽末吉画『つるにょうぼう』福音館書店　1989

動物が恩返しをするお話は、昔ばなしから現代小説まで綿々と受け継がれてきた題材です。最近では映画にもなった『陽だまりの彼女』がそうですね。昔ばなしを知っていると、現代の小説などをより深く楽しむことができます。

【すっきりする話】

木下順二 著　清水崑絵『かにむかし』岩波書店　1976

だれもが知っている「さるかに合戦」。本書は読み聞かせしやすいよう、擬音を豊富に使うなどの工夫がされています。さる退治の場面も、残酷さはなく、子どもが無邪気に楽しめるようにさらっとしています。カッパのイラストでおなじみの清水崑さんの絵が愛らしいです。

第 2 部　O・大久保美玲　T・高橋和子　H・原真由美

保育者になるための読書案内
これから社会に出て、仕事に就く人のために　2019
横浜女子短期大学図書館　2019.03.15